

耳をすまして寛容な社会を築く

(原文は英語)

エローラ・キアー・ナレスワリ (14 歳)

インドネシア南ジャカルタ市

バクティ・ムルヤ第 400 学校

私の家の隣には敬けんなキリスト教徒の家族が住んでいます。毎年クリスマスを迎える時期が来ると、とても幸せそうです。クリスマスはキリスト教徒の人たちにはとても特別な祝い事です。その日の午後、私は隣の家族がテラスで植木にきれいなランタンを飾りつけしながら賑やかにしているのを目にしました。クリスマスの賛美歌が流れ、それに合わせて歌っています。私が住む地域ではこれが慣例となりました。宗教的な祝日には、私の家族や近所の人たちが互いに食事をふるまいます。例えば、「イド・アル・フィットル」というイスラム教の祝日には、「クトゥパツ」【訳注：ヤシの葉で編んだ包みに米を入れて蒸した、ちまきのようなもの】と「チキンオポール」【訳注：鶏肉をココナツミルクで煮込んだ料理】を贈り合います。また、イスラム教徒は「イド・アル・アドハー」の時期には、宗教に関係なく、この地域の人たち全員に水牛の肉を必ずふるまいます。

クリスマスを祝う日にも、キリスト教徒の隣人は自宅の前を通り過ぎる人たち全員にきれいに包んだケーキを配ってくれます。おまけにイスラム教のハラール料理をふるまうために、私たち家族を自分の家に呼んでくれました。すると上のテラスから声がして彼女のお父さんが一番下の子に言いました。「ローラ、ローラ、歌をやめなさい！ マグリブのアザーン（日没礼拝の呼びかけ）だよ」

すると突然、その日の午後に流れていた賛美歌が止み、この地域にあるいくつかのモスクからアザーンが響き渡りました。私はイスラム教徒に課された義務である日没礼拝の前に急いでウドゥ（水で体を清めること）を行いました。清らかな水が顔を濡らしていくのを感じながら、私は心が穏やかになっていく感覚を覚えました。そしてつぶやきました。「今日の午後は二つの声が代わる代わる耳に入ってきた。互いの信仰は違うけれど、もちろんどちらも目的は同じ、あらゆる人を善に導くこと」

黄昏はいつも美をもたらします。この日の午後のように、黄昏は人間のエゴを消し去り、耳に聞こえてくるものを通じて寛容の意味を教えてください。寛容は大切でしょうか。そう、大切です。宗教、文化、民族、人種、肌の色がさまざまに異なる国に暮らす私たちにとって寛容は価値あるものです。なぜなら人々の間には違いがあるせいで起きてはならない衝突が起きることが多いからです。宗教儀式の最中に教会が爆破されたり、モスクが燃やされたり、宗教指導者が脅迫されて負傷したりする事件が実際に起きています。だからこそ、インドネシアではすべての国民にとって今も寛容が大きな望みなのです。この国は悪いことを企む人たちによって、その多様性やさまざまな違いが国民をあお

り立て、分断するための道具に利用されています。他に勝りたいという自分本位の思いから生まれるエゴが、この国にもたらしたのは国民の分断と互いへの敵意でした。

しかし私が住む地域では、人々の寛大さによって寛容の精神が育まれています。社会にある違いは、隣人同士の永遠の愛を育み、いつまでも寄り添い合うための強力なエネルギーへと変化してきました。ならば違いが衝突を引き起こさないようするためには誰が一番の責任を担い、誰が寛容の精神を次の世代に伝えていくのでしょうか。その答えは、この国の国民全員です。全員が責任を担い、受け継いでいくことです。今の世代がこれから担う大きな課題は、この地球上のあらゆる違いに対する寛容の精神を次の世代に伝え、調和に満ちた平和な世界で社会を築いていくことです。そのために私たちは、寛容の精神を壊そうとする人たちの挑発に簡単にのせられないように、どんな小さなことでも耳をすまし、違いの素晴らしさを楽しめるように、自分の耳でその違いを聞き分けるのです。